# 5　心理臨床の分野から人間関係原論に関わって

## ―― “つながりの心理学” から ――

木　村　晴　子（甲南大学文学部教授・
元南山短期大学教授）

１９期生、２２期生の、２つの学年、計４年間にわたって人間関係原論担当者の一員となり、２２期生の卒業とともに私自身も１５年間身を置いた人間関係科を去った。

原論は学生にとっては必修科目で、全員の共通の話題になるものであって．なにか大事なもののようだが、「よくわからない」という声が多いものであり、教員チームにとっても担当しているとなかなかしんどい部分だった。何がしんどいのかというと、その時その時の学生の状況にあわせてプログラムしていくのであるが（人関の専門科目はすべてがそうだが）、正直なところ漠然として範囲が広く、しかも人関の授業の要、という意識もあり、教員側にとってもつかみ難い部分があったからである。したがって、各原論のスタッフ・チームの事前のミーティングは常に長時間にわたり、産みの苦しみを味わうのが常であった。しかしまた一方では、それは担当教員がそれぞれの専門分野の一端を原論の視点から見直し、原論向きにアレンジし、わかる形で学生たちに伝える工夫をするという意味で、我々自身にとってもチャレンジになる苦しみであり、刺激的な仕事であったといえる。

ここではそうした部分から、筆者の専門分野（心理臨床）の立場から提供した１～２の視点についてふりかえって紹介する。

＜枠について＞

両学年を通して毎回のジャーナル的なものをMy Storyと名づけ、原論の場での自分の２年間を通しての物語がつづられるよう、その専用の用紙を作ったが、その際用紙に手書きの線で枠づけをした。枠があると何か心理的に守られた感じがして、その中で自由に表現がしやすくなり、少し意識レベルの下がったことも出てき易くなる、という臨床の分野からの考えを導入したものである。

そもそも人間関係科の教育というのは既成の教育の「枠」を外し、チャレンジャブルに、自由に動いてみて、自らの可能性を試してみる、そのための“守りとしての枠”を設けてあるのである。それは心理学的に言うと、“無意識が動き出す場”を用意していると言える。言い換えると人関教育は、普通の教育よりも無意識を揺り動かすことがはるかに多いということでもある。それ故、楽しいこと、おもしろおかしいことばかりでは決してなく、辛い、あるいは苦しい思いをすることもあり、そこに入り、自分や周囲と対決していくことが自らの変化、成長へとつながっていく―― My Storyを最初に提示する時、枠づけの意味をそのように話し、人関の授業自体が一つの守られた枠の中で行われていると説明すると意外によくわかってくれる学生も多くいたものである。

**＜つながりの心理学＞**

原論Ⅱの流れの中で「つなぐ」ということをテーマにしたことがある。

実際に授業の中でしたことは次のようなものである。

① 短大の授業の中で自分がとってきた科目、これからとろうとする科目をカードに書き出し、それらの中にどんな意味があり、関わりがあるかを考えながら整理して「学びの地図」を作る。

② 自分たちなりに「つながり」を考えてみたい事がらをブレーン・ストーミングで出して話し合う。

③ ある日の新聞記事を持ちより、関心のある部分を切り抜いてグループで寄せ集め、それらの中にあるつながりを考え、整理してみる。

問題意識をもってものを見る目を養ってほしいという原論のスタッフチームのねらいもあって、これらの作業は進められた。そして、「つながり」をテーマにしてきた終わりの部分でこの一連の作業の心理学的な意味を小講義で次のように伝えた。

“つながりの中から何かを見つけること”から連想されることとして、星座(constellation)の概念がある。もともとはあるべくしてそこにあるが、普段は個々別々に見えているだけで、そこに形があることはわからない。夜がもっと暗かった頃、昔の人は夜空を見上げて、そこに点在する星を眺めているうちにそれらをつなぐといろいろなものが見えてくることに気づいたのだろう。授業で行った「つなぐ」作業は、自分にとっての意味のある“星座”を見つけ出す作業であったと言ってよい。

それでは“つなぐ”と何が起こるのか？　つなぐ主体は“自分”である。したがってそこにはいろいろな形で自分についての気づきや変革が起こる可能性がある。しっかり考えてものごとを見、つないでいくと、まず自分の視点、価値観、枠組みが見えてくる。例えば、自分の履修した科目をつないでみると、その時は漠然ととりたいもの、楽しそうなものを選んでいるように見えても、何を基準に選んでいたのか、自分の目指すものは何か、といったことが見えて

くる。また、ブレーン・ストーミングで“つないでみたいもの”をどんどんあげていくと自らの関心の向いている方向が浮かび上がってきたりもする。

つまり、一見性質の違うように見えるものをつないだことから、自らの無意識の中にあるものがわかってくるのである。深層心理学では人の無意識の世界を、夢や連想やいろんな偶然の行動から分析していこうとするが、「つなぐ」作業もその一環といえるだろう。つなぐことによってその人の無意識の中にある欲求が浮かび上がってくる、あるいは無意識の欲求を現わすように布置されたものがこの作業によって拾われて行く。そうした部分を開発していく試みであると考えたい。

このことは次のように説明もできる。外界に一見無関係に点在するいくつかの出来事を“つなぐ”という視点で考えてみる。つなぐためには理由がいり、そのつなぐ努力は意識的に言葉によってなされる。言語体系の中でつながっているもの、言葉で説明できるものが意識界に残り、自分のものになる。故につなぐ仕事は言語化の作業であり、意識化の過程であって、その人の意識の世界を広げていくことになる。これは精神分析的な考え方であり、特にユング心理学の分野ではこれを重視する。ばらばらに見える事柄が何かの意味を持ち、つながっているように感じられることを布置（コンステレート）されていると呼び、そこに起こっていることを大事なサインとして考えるのである。

一つ一つが独立していて、因果関係がないにもかかわらず、まるで何かの力が一定方向に向かって動いているかのように出来事が起こっていく場合にも“布置”されたという言葉を使う。さらに言うと、心の中に持っている、未だ意識化されない問題（その人にとって、対決して乗り越えなければならない課題）があるとき、ちょうどその対決を誘発するようなことが外界で起こることがある。つまり、まったく偶然に起こった事象であっても実はその人の心の中の問題とつながったものであるということが意外に多いものなのである。

人との出会い、事件との出会い、さらに一人一人にとって人関との出会いもまさにそう言えるのではないだろうか —— と、こんなふうに話は広がっていくのである。

ユング心理学の分野でいう布置とは簡単にいうとそうした概念なのであるが、こういう特別な学問領域での考え方を原論の授業の中でわかるように伝え、工夫するのは楽しい作業でもあった。

各々の意識の世界の中にいくつかの「星座」が出来、残ればいい —— というのが筆者の小講義のしめくくりであり、さらに原論Ⅱのラストに向けて「つないだ」後の「切る」ことの意味へと関連づけていったのである。

本稿では何を、どういうふうに伝えたかを実際の授業を思い起こしつつ述べたので、内容に繰り返しがあるが、ご容赦いただきたい。

人間関係科での１５年間、私は専門領域のことを人関の教育の中で生かして

伝えることを工夫してきた。人関を去って心理臨床そのものの教育の場にいる現在、今度は逆に臨床の専門教育の中に、原論に代表される人関での教育の体験をいかに生かすかを模索中である。私にしか出来ない授業を目指して……